道二翁道話

和書門 類
二七五二三 號
八九 函
七 架
六 冊

内閣文庫
和書 類
二七五二三 號
六 冊
一九〇 函
一三 架

内閣文庫		
番號	和	27523
冊數	6 (4)	
函號	190	274

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

大日本帝國圖書之印

明治十三年購求

天命之謂性とてうまるゝに
貰ひうけし此玉珠にて
磨て光を出せよ亡師中澤
道二翁の夜に日に呼吸して
人をおしへ諭せられし唯此の

玉ハ琢の泥をはらはせて
君を君とし父ハ父とし
夫婦兄弟朋友まで
有情非情に至るまで皆見
ちの人咳きの人使して世界

一めん中和にをさまるのみ也
云ふこと能はずといへども
すこし此四篇に述るといふ
享和壬戌之春
安西湛松主人書

道二翁道話四篇巻上

浪華 八宮斎輯

莫見乎隠莫顕乎微故君子慎其独也 中庸第一章

そもそく物事隠したことほどよう知れるものはない。その中悪いことほど知れまする。悪事千里とやらで忽知れること思ひものじや。和泉式部の哥 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ。此香やは隠るゝとは、こちらの知らぬ所で、何の香のにほひと香が来る。しいはうじや。色こそ見えて嗅しませぬ。むかし尾籠なることながら、堪忍

沈香も沈香の匂ひと香が来て説法も何とも聞か
ぬものじやないから隠すよりも顕るゝはなし。隠さう
とすれバするほどそれじやによつて腹乃中よりと臭で悪
びとこうする事じや。此懺悔して御仕廻なさるゝ懺悔これ
腹の中の洗濯。悪縁も首切まで仕廻へば罪が亡び
て成仏とは此の如きものじや。飯喰ふ後の棚か
仕廻ふたる家をして居るのじや。去によつて我の
腹の中は日々に新に掃除がすんので清浄な。此君
子の後の中をたとへて見れば清浄な白紙の中な
ものでその白紙にちよつと色の毛の先ほどでも墨

まづハおぼへるさまぢや。悪茶屋の座敷で客がおやまさんで
炉の間へよりてならんでゐる。即に気の毒な事ぢや。出もの
はれもの所きらはずで。お山が放屁をとりしまつた。
其ときせ客のせなのじやまにつくひどへ。お山さまの
とがめぬけりどさんが勘が悪ならじやの膝袋から伽
羅を出し香。それを焼べまぎらかさんとする。其側
にゐる座頭が鼻をひこ〳〵して此ところぞ此悪臭
薬種屋まで行きまするか。お山が何としらへ。座頭
がハイどうか本草屋の薫のする臭がいたします
どうかさ天地は聞しうるものじや屁を放ば屁の匂ひ

が付と忽見えるやうになるのじや。又藁くたの
腹の中は。随分不掃除で目に見えぬ埃が溜り牛部屋
馬部屋の中よりも猶むさくるしいソコデ猫の糞やら。鼬の糞やら。
積上てあるなれど。大頑な埃があつても。格別目立もせぬ。
どうぞして臭しもせんと其が出来ぬかと暮してゐるが。
是が本心のあるじがないゆへ。明屋は荒放題なものじや。
いかんとなれば住ふ人がなければ佛なき堂舎の心地がするなり。
近所より塵埃捨て来て。夫が適合筆書ありべう
と書いてして太までが見る隠ぬやう。つまづく草なり。
主を置きなされ。きつい心のもの不得心の住ゐて。

こたまらんとけしからぬ事も出来ると何ゆゑか
孟子の中にあることじや。滄浪の水清まば
以て我纓を洗ひ。濁らば以て我足をあらはんと
と其郷の子供が謡ふを。孔子が聴玉ふて。小子是
聴。水が濁らば足をあらひ。清ば冠の緒を洗ふ自ら
之を取ると御示しなされた。何とみな難有事ではござりませぬか。
本心好の所へは悪が来るが道の理だらう。其謡
謡を好の所へは。謡うたひの衆が寄り。浄瑠璃好
の所へは。語るものが浄瑠璃の衆や。芝居のまねし。
だらうけし。皆此方の腹の中の好のが寄たる。縁

きよいものじや。瀬戸門の寺蔵に掃ていらる所へは。めつ
さふ共が小便をするものじやさかいにきたなうて不
掃除な所へはゑらくきたなくの塵埃捨に来る輩
何飯がくさると虫が涌。アレモ飯のあるうちはねさしたに。
どこから来る。飯のくさるのがいやと虫が涌てゐる
ものでもないが其で能々法合点なされ。まさかひとつ雑
生外から来やせね。皆腹の中から涌出して拾
きませさぬのじや。捨る涌悪い事合。此みな能腹でゐる
ものを能々智恵市が吟味いたして往まてゆくさ。
随とぬめしてこ終りと是を要。今日はいうて掛腰じや。

休まして芝居見に行。悪い事門じやと向ふだつりり眼
んでゐる。向ふの悪ひのじやない。此方の腹の中に智恵
市とね合して内る色へ法出しくあさぎりれまうぢみ。
捨金涌がんわり悪まのはじてゐる。是が腹の中に智
恵市のないふしい人の所へ今念ちよがいちがござう
ま只法若労なからら法出席下さりませと。どふまあ何
あれはじいふて往るまるりので。皆腹の中のうかじや
ぞへ父女中方など読に向ひ家住とひゐさる。読に關
まうへ皆此方の胸がだるう。盤はゆがくハせぬから白
粉まできまぐらしさのあいへうと是を吟味さるのじや。ソこまる

此方の用事でござる。神佛に向ふにもその通り。
向ふに用はなくば此方の心に不浄なる事あらば。不忠不
孝あらば。商賣に無理な儀をさせてくれ
いはうて。子孫断絶するやうなる事をしてはいねうと。親心が
を神前の神鏡に向ひ。まことしてよければ。ふさじやる。これ
ひ親をしればこつひ親がうれる。鏡は神の中略すて中の
我をなおせば明神じや。我正直の心どうしてどふぞ
今日人のなる道をぬゆう。親類縁者と眼を結ん
ではいねうが家来をむごうしてはいねうか。家業に不足残
拂ふてはいねうか。悪眼とよい眼ふしてまふてはいねうと。臆

の中を吟味して。不浄なる心を拂ひ除け清め清くに
禱しても勝しまれ祈らぬとても家内安全息災
延命子孫長久の御祈禱じや。然しどれ程なる小
人は此裏からし向ふでおかり期ましてどふぞ此ふびの
賞物利潤得さして下さりませどふぞ上の断のお源さ
女房に思して下さりませし神佛を嫌へ無上嬰の
ようれにそふさぬる。晴いものじや。ましやにまゐて己人
のうりのを私していどふぞ知らませぬゆゑ。子曰
なうのかうし私を欲ありに不孝致しましたゆゑに
ぞいござりませぬか。拙私は大孝嬲諸ござりまする。

ござりませぬ。満足致しませぬゆへ守りなさり下さりま
せい。何ぞ先の人が死だら。我勝手ではござりませんと。目を
明て魔王でありなさるのぢや。怖いものぢや。今日の天
道より恐れ書出して掛乞に逢迎る。徳病者へ患
不孝の借銭は未だあそこも水はねかくし僕はつかる
らぬなどとまづるあは報ひ悪人請めたまへ外様し
の報ひなり。何もかも一緒り打迴ぞ。何ぞ一處は
して諸親魔鏡ひんまりあ何かましい。コリヤなにをさ方の
事じやうい皆私が腹の中の蔵悩ぢや。私は若いとき
ゟ大不行でこんなるのぢやうりへ。神佛となぶ
りまりのまして拝りました。勿体ないのぢや。今でも
其へ母さる寃めが。腹の中によりかくして居りまする人。
わたし降伏するのではござりません。其の相伝おやと云ふ
て成仏さりて下さりませ。まう神佛は方親と叶
へさりしやまならりのうしとそよ。中へくそうしこのぢやな
〽千早振神を祈ひのかなふなり人の直偶は逢ふぞうらし言
此神も祈ひのかなふなへではないのじや。神佛は一切衆生
の祈ひが叶ふて守らるくぞよ。それなれど我神佛
の祈がひでしや。此方は信心さへいたせば何でも叶へて下さ
る。信心とは我心の誠よりもるのぢや。なさし誠がない。

諸うちの教ひじや
詞 行でも騒るゝぞ。ずいぶん人の心にまことあらば
さて此方に徳があれば。親をうけて親をかけさせぬやう。
此方の心も嬉しく。親の為の勤めのじや。子たるの勤めじや
始め王すなはち出世がならぬ人となる。親まで是ぞ
ひとりてでかしよつたら。立身出世するのに違ひない家内
安全も商売繁昌も子孫長久も籠りてある。しかし
此子に勤め行ひさうとしてや。何でも如才なく遠ひ
まさるは此世うるはしと又親達の為に此工方が我がなれぬとは
せぬ人孝行の仕とは何するとはござらぬ。そこで

じやうは親子は一世といふて。天地かぎりの心が一世
じや。さるによつて此子が面に親達様を見かけたら。父母
の遺体じや。和論語に最の朝綱の日。親もなしよ人
ども我身則ち父母の遺体なれば率く物に父母の
行ひまで茶を飲むもめしを食ふも。父母の御行ひなれば
も。一言一行も欺くならぬ。他人に我が身に一息のあいさも
我心にとらぬはしとなり。大孝大切にせぬやうならぬと
とらへば又ま合点の此方が分らぬかでぞうしや。此
子が面に親父様まやにまつでもしが酒と飲さへ也を
子が面に親父様のお召しじや。先ととまんが孝行じや

よつてまづ吾此世に仕事の仕そこなひは御安心親の御退屈なさることじや。よつてそれは体で。又博奕が好じやとあつて是を打て父母の遺体ある迄が此の博奕を打が孝行じやとおもふてござる御方もあるもの。しかしてまへ仕出に荒がなうて。討死せらるゝやうな大事の親御様方に荒なうても孝行とはいはれぬ。身体髪膚これを父母に受て敢て毀ひ傷らざるは孝行の始といふ。身を立道を行ひ名を後世に揚て以て父母を顕すは孝の終としてまた荒なうてたまるものか。此有る遺体ものじや。親を大切にしたならば弥身に付て。然る所の親御様が日頃なさつてござる。其悪の端に数が有りてゐる息子が成長をみて大きな小役を立て。大事の親父様の悪事を喰ひ盗賊めし側なる割木をもつてひきやうしく言て。数を逃て親御様の身をしらとたゝき棒であけてやらりもないもの。うして仕出して此世の分ぞなる事ではないけれど面白い事しもや世界の難儀いたしまた此世のあるやうら始なされば悪いかでも。一遍に待ある時は。まるさんなるものになく仕出にもなる。期しらんとりもめてとうかは役に立ぬ人にものを忘せば其身の功徳になるに。却て盗してく

見聞してハ功徳になるやうにおもへ心得違ひが出
来るといふものじや。数よくやうやうねそうるいや
贅物ハ無理な虚切。贔屓物する利を貪り。人の汗
あぶらをたの門多く家肉を喰ひ夫きる気しで奉
悪法傘勤むるも。皆親先祖の臭ぢしらとて
きるぐいでゐるのじやぞ人去よりにたて此難に奈
しでも不実な事があると。束に親は擯方と地獄
乃釜へ実落のじや。肝疎なのでいかうか。又刑の
報ひ三み。識不孝よりまずかいはし。故に日々に新に
我に競くとして此あらに識を勤め新くよう外う。

人の子たるハ。鏡ようげのうつかずしく白眼がふらそ。
然ハバまらぬ。鏡をかうも私心なきうハ邪佞鏡の徳ままき
白眼付て鏡とみるる。然ハ親乃鏡なのハ鏡の化
りのといふものじや。不忠不孝しても仕合よく斎
爰不精して。も繁昌し。不忠者しても自もの延
命の諸仏本統なる神仏なり。化りのといふもの
おや跡くは悪が出来つやうるぬ悪開き
ないでは方の勤めよみそるのじや。不徳者の神ぞ
極楽いさるけきかぞくといしを勤めていうるもあるかう。
とかく難い御ろじや腹の中よむさいものいうハ母う

心さへ誠のみちにかなひなば祈らずとても神や守らん。
故に君子は其ひとりを慎しむ。爰に江州の宮と
いふ宿にて。孝語の咄を聞し折節。挑灯屋の長八
といふ人が、善訓を守て此獨を慎ですを勤めらるゝとかう
てはござりません。是は親と様が後妻を入れてから親子
喧嘩が始り、既に手錠も仕置が切てみさるのじや。
それが善訓を守て聊しも難いふ事もいふさまへ
とはまるく此母うへ親子一生不和で暮されたる人の
皆はかりの事じや。去る獨の様に親子喚合もさるれ
何の事ぞそくいふとまし。いふにと始めて聞が迄
さまりとうしく。孝行仕顔せられ。是が何ふかまへらん一生
の間。孝行仕通しの咄じや。されば我ひとりといふもの
じや。又親に孝行とされは備後の孝行とは遠い事ぢやと
神仕よひとりのじやないけれど心学の力がないと孝行
仕通しの咄が出来ぬ。勝は此本心を知ぬといふは難
ものでなんでも天地の活てあるのじやとしつて本心が胜に
知れる。底意もなく私もなく聞もなく我ばかしで
始まる。天窓のきらりくる爪先まで天地いふや。
四時行れ万物生ずるだろう。竟に奈の内に孝勝
のゝ。此外によいしも我が有は我があるまたは如何といふ

あすがらいまで親子の間が調ふたものじや。何ごとかハ
実よろこびごとたまらぬや我が身のまんが何ともない[illegible]
もろもののじや。本心をしると何ともいハへぬゆゑ
今日の天命が謹んで承るじやと身があるしらずに今日の道へ
務めて今日を暮しての難いものじや。まだ肝心の
我心を知らぬものハ当どもの證拠となるのかので。
身が務めを知らぬた人ハ只中ですて驚惶で先祭
されよい。慌驚されたがやた旦那様どこまでもありませう。
今ごと幸ハあるまい。ヲリヤ知らぬでござりますてやとやま。
ヨウテ驚き擔がハツ〳〵いふてうちろ〔歸〕て往いた。こちら〔拾〕

てわかりしても猶何から何まで先が見ゑぬまで驚きます
うろ〳〵乗人まう後く〳〵。とんと天竺浪人雲水も同じ
合。雑縁なりのじや。人ハ孝悌忠信といふ務め所を知らぬゆゑ。
朝から晩まで遊ぶなしの長旅。雨が降るといふてハうろたへ。
日和になると来がかるといふてハ挑らり新しいものがまゝや
出しさういふてハ銭を無くし。芝居ハ何々といふ看
[illegible]もやうね網子よも知らぬ。兎角新
[illegible]りハけるそれハ淑ね何ぞよいもハあいかと世
間が勝でハ狐が雑縁とるの。狸の喰ハりのかゝへの何といふ
も眼のものじや。今がるけまば棄んで暮さぬ者の揬

に翁まねとゐてもうろうろとさわぐ。旦那どの
旅行所がちへと家内諸ともにてどゐしの長あそび遊。
失度ず数が内互らう娘やらるの渡世じや。孟子の曰
人の道なりや。飽までに喰ひ暖に衣て逸居して教
なけれバ禽獣に近し。なげかしきのは世の中間じや。その受ける獣
でも我の道しくが家業を精出せう。善事に向つて
ふ鶯もうらへ雀や燕がつねに商売の合ねしらずて叶ぬと
嘆くらのもあるへ。狸や狼が袖乞に出ぬそのもうあらへ。あやふに
けいし此般さらに教へのなき飢らう旋まで我の道しくが
あるどやう。雀は雀鷹ハ鷹ぢらうしかうしと精出して

勤るやうに成ぬに鷹が諸人に教けられしと法がある
いふて忠孝の二ツをば心の底までが進めてからるる也
なくれ夫ぶといふもの人じや。実の人へ此世話あるさるの
じや。まよ何でも徳にならうやあうぬが又此長八殿の
朋友が五六人もある。其衆達は禅法を参禅して
我道がくしらぬ鼻ある連中じや。皆様の法を得
なされや。此禅法しらぬは至て大切なものじや。夫
を悪う修行ると何けもあいものに成て。真
直で鼻のむせうなるがなかりつよく楽として居る
もあがかる。此長八殿がどふぞ此方の道へ引入うと

いろ〳〵様々世話をしても合点せぬ世話を
すればする程先の臭がつよふなる。是でも長八殿は
上根にあり。どうぞ因果を退ひ機嫌をとり此方から礼をいふ
つかへども後には途中で逢ふてもものをもいはれ
ぬ所礼をもいふた却て人中で恥しめらるゝことと
なりたるさし当りの長八殿も如何と膝つきし大きに
腹立て私へ仰しやり様此度流離で本心のみ
難ひすとなしましてアノ荒中は年来の朋友でござ
りますれば人何とぞ此方の不届へ詫入んと世話をいふて
さま〴〵進めましたれど一向気をあくまへ却て不礼と袖

し〳〵人中で恥辱かゝせまして何とも此段心外に存ますれが
かやうな時はいかい短気しましたが能うござりましたとの仰せゆへ
じや。ソコデ私がやまれば能ゥ物を合点しなさるがよい。此方
から礼を言ひ機嫌をとりて居る者を却て憤りを起
し嘲るとは。ソリヤ行倫といふものじや。其行倫者こそ
哀んではしてなく腹立るといふは。此方が行倫者へ弟子入をし
るといふものじや。何の其は行倫者のあるは腹立てゝ悪
らいでもすむ事じや。先ッ此方から礼を云ても無の
も礼と向ふから不礼をするとなふがるゝ遠慮が向ふよ
無きもみゆるといふものじや。此本心と知るといふは

外のやうではない。其を自得するのじや。そこで向ふ
に用捨あるがいい。此方の腹の中に何の苦もないものハ
なんぼう吟味するものじや。故に君子乃学ぶところハ
まゝ此ひとりを慎しむだろうり。一体ハ君子も小人も
はじめ何にも給さずハなし。石川氏喜平咄しやと
て白眼請して何ぞくものでもなうい又君子の言
に当るとも節にあつまるとのちがひで。君子小人が
まうう。君子ハ今日も同じ人が大ふんしくあらび
しいふて賣あるくるハ皆節に当てある。君子
に賣しも無事。同じものじや。ゴレ大根じや。ハイ大根

なんがよつふう節にあはねバ何もならぬ。大根一本拾文に賣りてよい
ものを三十でどんをとらうかせうとはひすれど向ふが武
十拾文にも賣しやうな節にあはねバ何もならぬ。コテ賣人も
拾文は惜きりてよいものを十六文にまさんせと節にあはず
まうまう大根賣がもれと節にあはで遂に損達に
大根ハ性にあはぬものよふ。イヤ何によらず紀にそこかひ
拾やためて此断内で大ふん賣れずるはぬことたべ
節に叛まうまう叔父の悪口の言ひ合何の役にたゝぬ
ものじや。能く合点して見なさい。こゝで大ぜい三百人の中で
て大根一把まで一ト通て歴々の男が節に叛まるる

ここな何じや見が女房にも見せられて婆々はすつかりと龍ろ
しいものじやぞ。又見も大きに虫ぎらひだらうがえゝやかましいへ。
本心を何がしら、せうことなしのじや。親孫様が唯は
しかたがないとつくふて往ねばよい。今お手前がござりますれば節
に放さるゝ筆者の気がとられては聞かず。ひるまじ。コハ素いやい。
どういふ事じや。カツコデ口の内ぐいの両側もと節に殺ける事の
ら腹に節に放さる。五合剛いもののじや。佛家では此節
に放るゝを地獄といふ。又節に外るゝを極楽といふ。又鯛中
庸の世じや。又至善の地といふ。心のちからも上天の
事は無色臭もなし。困よりありがたくの不浄を見て

心よりありがたくの不浄と見ればこそ。胸の中よりさし挟むの
分別じや。それ迷ふて見ても鳥は黒し鷺は白しどうの
せうに迷ふていても。水は冷し。火は熱し。又分別迷ひを
止めて見ずとも。何ぞ火は熱し。水は冷いはしこと
ならぬ迷ひの妄想をやめて心に不浄と見ぬなれば
ゑる事には神とはます八百萬の神達を神集めに
つれて祭の神儀になり給ひて。なんぞと申ことぞ。
此何の有ふ世へ吸口が口の側へ来てある。何のとりまる
たゞとゝ呑んでゐるうまいものじや又天窓が痒いで手に
手が行て掻てゐる。右の手に用があると左の手が動て

みるもがしちんけと行ておくまいものぞ。左右ともよふりと
合。気がつけば直に明に居るゆへ。心よ何でも云出して
聞しやうとおふ耳よも足が働てゐる。律用一致致密
備はし身と心と合一して天地自然の御相も則今
目のある道は即今のよふに明らかな也。今日は結構な御天
気様でござりますが左様でござりますとはしる事。ぶん
もしある者ね先づ。よい天気は知までにつるがやけも
どなたが知るぞへそでゐるは今日天地の此姿の直り
を説法なさるのじや。是が無心無念の本佛の御説法
おしも思慮分別なしで節よ当りている。世の中の

妻り実ふ事も法を説也。三千世界が此説法じや。又雨
の降日今日は天気でござりませぬ。誰も知まへにしてる論が上へ
い。人はある遠ふてゐるよふな天地が此合点なさらぬゆへ。
どこへ於ても通用が出来ぬ。又何が知てござるぞや
しくちつと都那の不出来る人を見て。おまへ様の都
まきさうに都やよつてぞ見さがよい。知ましてござるやけ
ときさんなりのでも腹立るを苦しや。天が人の心をあ
よれて天を悪口しより請がりとる者へむの様な恩を
まのでも腹立る盗人と盗人とが知ませぬもの
腹立る様なると様なるといふもほじる者や。みなまた小人を

小人らよてハ腹立ぬ我身でハないとおもふてゐる。おまへの
歎をきたなひ歎をやといふてゐるのじや迄何ども
おのれにあるだやまれく破でハ不義不道を紛ひを
がら。心にはほしいまゝかな。悪悪若根を能し陰徳を積
ものじやといふてゐる。盗人が孰でハ盗しておみうな
の目ではほしいよう。かで利口な者じや此方の緒摘な
事とおもふはあかる。世間の人もねるハりのおやとおもふて
あることはしもので愚か心と孰で孰の殺し〳〵。家来がね
人を扱ふて丁稚が座敷に居り旦那衆か豆腐結
摂したる。こゝ迄の掃除どものじや。此自用が犬の獄裂

のやうに如くまけが寺庵ツヨテ神佛聖人様方が乳の
毒におもて数を出立るさまで〳〵。此心と親と一統する
ゆゑを能合点せよまうしも一体おのづから心も親も引きう
べく。亟は天の切開するのをまうしめおきまうて人
には微塵いさうも私心といふものではない筈とどうり
まへ。はや元ね先うく天の霊明私に依りて心ゆゑゐを
まうしまんなる古の明徳をまかれ明らかにせんとて欲を
るが故にまゝの如きハ極がく。欲あるれが極が出来業々
の高に掃も出来る人ハ孝悌忠信のこと。此佛経見を
開しめんがあくの世れ出切したりのじや。やうとつへり

出現しさまのではない。夫よまが出来るといふていふ様な人。今までのよけさもゆうよくまさうろさ人。換ゆさといふていふろさへ蚕らまでくいふ様な人。蟻らまでいふ様な人見んなふうろさ人。俗なようろうろさ人。佛因を覚さいうえろうう是が本来の面目。親に孝行な人。大ざいといふうえろうう是古の明徳。其親を親として其長を長として養いちらうく鳥そかあうく。是何りのう嘴ぞ。又何りのう嘴をや。石審付て作らうじませ。様何らう此方細工しやでござりませぬまへる此木の蜘が巣を作るのを見ましたが。蜘が巣と造るはあうらぶらりさきかりて風まちらしてある。所

まごちらうぞ風が吹く。其風に随ひてチヨイトひつ付其糸を經として緯をかけてまはるが。蜘の經乃中央のちやうな何ぼうもく糸がみでも皆まひ合ぎ薬とうけんとお人が何が糸にあの毎らぶるくりくと天の道に出来るは不思議なりのじや。其糸を縦横でチヨイ/\どうけて廻る。塩梅凌めさうのじや。曲尺も寸法も持ていぬながすら遠近さね。去りしては蜘は外しさりのじやと蜘のこううり蚕てござるうてしが。蜘の智恵を工夫で出来るのういる誰が使てゐるぞ。考て下らしませ。花濃こは牡丹の齒何ど見てるのみ季じや。あれが牡丹だらう

咲てござる菊の花盛。さてもあざやかなことじや。さまざまの
花をならべておいて此方より出来るぞと菊ずきなさる人の咲て
ござる。扨つくり菊の根や株でなりては出来ぬ工夫地の
父母の昼夜御苦労なさるゆへ此花が咲たが出来ぬわけ
さ様が咲しさ様がく／＼　我方をも名の菓ならへ
りのをみまじさが花は此方さへ細工ぢや。小細工
の此方なりのぢやが花の根の此方なるものを髪の毛の様
なるものと集めて編むものぢや。水の如く学んでいる地が
ちさへさ茎を様りよ編付さりのゆへ風が吹てきゆる
がきぬ用捨がしてあるけしからぬ細工なものぢや。アレが鉢

の恩澤分別で出来るものぢやそれは細工人は天地よろ
さひよりぢや。考て見らつしやりませ。私も此ろく／＼の息だ
つうりて腹の中は虚空じやさかいしが仕込であるのでは
なけれど。何ぞで云りよる人が此方よふ。うぶ／＼きる
して押りまた。燈の様か気が出るとはし方よ
ものぢや。何が此方より出てゐるぞふしぎなもののぢや
ござります此がのでここそ目鼻の細工力へゆう
むかう誰がとるぞ記人も目もあり。眼もつれまで
何よりも見えぬ。何よりもありまへぬござりましさりのぞ考て性
らつしやりませ即今目をふさげは暗闇じや此方さへ誰が

見てゐるぞ。眼中がぎろ〳〵と見てゐる。ぎろ〳〵が眼
を見てゐる目をふさいでみても。何ぞ音がきこゆると
一番に耳が見るぞん〳〵と聲えや。ずつと嵐の下握う
だうのしやうかわいがると目も耳も鼬が見ねすと鼻
が見るる。其跡じの清き匂へ出しも遠いの味の嗅へ見る業
これよりも見た匠おや。へ行かうずしれ舌が見る。腰のへかくらう
が痒く腰が見るる首が徳で何世うわ織る出ん。アット笑い
是ハ盗しやし膝が見るる。一切心で見るる魚へよ歩て見るや。
喰へるや。嗅で見るや。おふて見るや仕て見るやし。世界の音
を観じ見るる。娑婆示現観世音大悲一体無量も利

益ス十云此声ハ何といふものぞ三界唯一心の功用で
見るも。歩も。言ふも。此娑婆世界へ観世音の
示現なさるのじや。其を見ると歩と提婆めがお不
造うりのうして。何がかなしい。かなしいどうもあるまいかうし
さんと悪業を積うさうで。生身地獄に入らつて其二
ぐう大地引裂て地獄の底へといつすしやうけ此は
るが去の中で。むしくとる提婆などとなかる
ちらつと吟味してはなりじませ。穢れ去の小さな
のそ中から何がかしいかしいは是れどうせう
秋ハどうせう。何といふも今の事じや。今があけ

立ばかりもなりませぬ。人を突倒しても金をとる。しつく
手にいれさへすればすむ。此拙者さへよけて世界ハ地獄
餓鬼道ハむかふがかまハぬ。我さへ極楽なれバよいと
どうぞ大慈悲を施し。成仏さして下されよと
いのりませう。何ぼう祈りいたしやうが。三界唯一
心といふて天地の恩ふたつとなき一ツの誠を知らねば
叶ぬことじや
傀儡師踊らするなる人ハ般若仏出さへ鬼を出さいて
三界ハ元と一ツの誠より観音を出さふて提婆を出
さふし。御望次第。好次第じや。其誠が天地も

産出しよりのゆへ。天地の恩ハ二ツもなし三ツもな
く。目もなく鼻もなく。耳も口もなきものなるぞ
ど忠信孝子の噺しを聞てハ。感心のあまりて涙が
こぼるゝ。又不義不孝の噺しを聞てハ何となく
悪くしき心生ずる。是ぞ性ハ善なり性に
形の人の本じや。此外に教ハいらぬ。称名も仏名
も此外にはなへ

道二翁道話四篇巻上終

道二翁道話四篇巻中

浪華 八宮齋 輯

〽迷へる心の中の誠こそ獄よしねさとりなりけり

此誠の通りをせねをうそといふ。それ天地が合点ぬさまをね少人其うそが誠になりますぐ。天地の間をハアスウくるしきに迷る地獄の。誠ハ天の道。誠ハ物の終始之。誠あるれが物なし。是を人面獣心といふ。誠ハ人の心なり。親類に関係ないし心よれハ男女の差別もないハ。人ハ心に天地と五倫五常の

道が備つてあるゆへ貴きものなり。此道がかけるが人
で無し。神といふも佛といふも心の事。聖人といふ
も親孝行の事ではないか。心の事じや。主人大事、親へ
孝も心の事。百姓といふも心の事。商人といふも心
の事。町人といふも心の事。侍といふも心の事。侍
がやはり刀を差す。刀を差す事ゆへ侍といふか。侍
が下を納る心がなければ刀を差さぬによつて
侍といふも心の事。坊主もやはりよつて衣を着るか。衣
を着るゆへ出家といふか。出家といふも心の事じや。

皆親孝行の事ではないか。心の事じや。心の外に名はない。
名の外に心もない。女中方何程器量がよふても。
衣裳が能うても悪念大事は心の事じや。是を
たとへて御咄しませう。結構な蒔絵の重箱
に。綾綸子のふくさをかけて。其服紗。種々様々の
めづらしい模様。縫もあり箔もあり色どりて見る程
の人が目を驚ろかし見とれんや。あまり此やうなる見事
なふくさ。此やうなる結構なる重箱。内は何であろ
ぞ。虎屋の巾頓か小倉であろふと明てみれば馬の

屎ハきたなゐ相じやが胸が悪なるわいさ。何が不肖や
弟子が能うても馬の屎じやいかねぞへ。又木綿の
洗濯風呂敷は重箱の縁もかけて付る。抑もきたなき
ものは中の何でありぞ。ハテよしなきさへむさくろし
い。其うし何か甘いる一ツおあがりなさりませ。
コリヤさゝあどの家へも流こましさうじが味ふてつん
く。コリヤたまうぬと重箱のきたなゐも木綿の
風呂敷も打捨れてもつかまじや。何と能し
されのおやどうか中の代りの次第じや。上の間の

おげん様器量ハよし風俗もよし。たまさか間のたち
んじやけれど。どこに一ツいひぶんなし。衣裳もきん
とのるげな。夫ハきれいなものじや。あの娘なる子
を嫁にもらふたら。大きな仕合じやと評判まちく
じやが。うるさく些ハどうでも親御様方に。ちと不
返すなさうな。夫ハ心気が縮ひまする。扨くぶりく
が出るを母御様が機嫌をそこねてござるといふこと
じや。どうでも仕事が余りにさへじやなさそふな。
其うまりに芝居が目を見らしして衆の役者乃役

を付てござるげな。イヤモウ其母ある馬の尿ハニヲ止め
よいとしませうとどんとお傳が出来ぬ。又横町の
おちる様お三光ふとり肉。瘠ハひくいねまゝど。鶴が
黒ハ飛もかうとふして染ざるなれど。親様方への
孝心がよいとゆふなりぢや。内外の気や出入の気の働し
又様ウ陰気が付と嘘ぶ時じや。又まさぬ母うるハも
のじや。いゝ門て其陰まゝ極めませうとチヤントお傳
が極まる。是で様ウ陰得心なさりませ。是も女中
方ざもちゝおやうハそ人金銀財宝家苑味噌

部屋までゑ引包まれ旦那様乃奥様の若旦
那様の。御後室様乃。御家人様のこ。ちつとゑる
ともやさ通てしも馬の尿じやいかぬぞへ。旦那様と
いふも心のこと。奥様といふも心乃ことじや。名ハ旦那
様でも心が旦那様でないといかぬぞへ。似せ物ハ通用
が出来ぬ。重宝やつてさる用事ハ今の中の代物が
大ろうじや。孟子曰人く己ゑ受きものなり。夫々皆
似せものを掴して姦ゆへやらまし。勿論これハお
むや。此衆きものを佛家でハ己心の弥陀。唯心の浄

ど法華経には百由旬の宝塔が大地より涌出ましま す。多宝如来が内にござらねば。何にも役に立ぬ 誰も説明をするものがないが。先づ宝塔とは何ぞ此 躰の事じや。此躰をさして出来さしのおやぞ。 一滴の水が母の胎内十月のあいだに臭が出来目が 出来耳が出来口が出来手足が出来てとう／＼ 建立なさる此宝塔じや。是は誰が立さすのおや親 の細工だらうとおもやうなら。是が親の細工ぢやうか出 来ることのなり。世界中に行倫者は一人も出来ぬ ものじや。鳥の大きな女中や象のひくい者はないの ものがおやゝあつて立ならじません。出来へせぬ。二人ながら一 所へ寄てましこそあせんせや。利をされば鼻をとじて押通 るイヤ力がなされば目も手も綴りが出来ることも其母の に自由に出来るものじややうかい。とじられる時は西方 極楽に無心境界も見じでもる細工は叶はぬ。天命じや。 天命に違ひいうかへ。天道も天命命もまた天命。 元道を欠くなものは天命の元道じや。つへんたとひ 留まることなく落着するあるのはなるがは。我智恵如覚

で今おみなさまがたも世界に生れし人は一人
もるゝハござらぬや。皆天命なるものを持てあるゆゑ。
自身一人前の願ひ事をとげるなり。捨おいて
今日も一日ぐらし。御先祖の御恩で先雨露に
つゝまれ濡もせず。一日ひもじい目にもあはねば三度づゝの
飯もいたゞいて。其のうへ病気をするでもなく
な雑喉いわしも一ツゝ味ふて見さへすれバ何ぞの不足
ぞ。太平果報の上ぢやもの。それに人にこまり結
構なるを知らずにホンニ何とやら見えぬ。肝心の我家

てある結構な蓮華を踏ながらして居るものがあるハ。
何ぞありがたいではないか。此蓮華をふみつけて居るものを。
たとへば伯父さんのやうに。ちと丁稚の女中が親方の
やうに長吉が一日に一日暇をやるほどに芝居を見たく
と思ひはいりし雑ても遊びに行ますとサア嬉しうてゝ夜の眠
らずにゐる夜の明るを待つて水とつかひ
手めしをとしらへ香の物食行の法に包みな
ころへ入て。門口を出る時の嬉しさ天へもあがる
心地じや。扨芝居へ行てうつとりとして楽んで

なる時刻見に向へ行ば胸腹が大ぶんさびしう成
。世間にも能ある中食時分じやでそこで懐中の
銭の紙を出さんとする所へ向ふを見れば茶屋に田
楽いろいろの煮売もの其側で丁稚どの。
どうぞ所の店のあたりで見れば勝は飯の中かし
もうし我等が手で内の蓮華を踏出して落る食が
大きの所ぢや。此丁稚とのにもちろん先へ
此子第ではあるまいかと思ふ世の事さうなるか此母から
思ふこのゐれば我蓮華とともにまでよその蓮華

よ国が付ゆへふたらかしてゐるさのじや。そうしてもの
ゐる兄が丁稚の芝居だろうがなやらへぞ人。様が考へて
皆から踏ますせ踏もしくは朝から晩まで踏出して
落通したもの。扨又向ふの内から田楽おそて来て
人はまた向ふの茶屋から湯を。中食もう勿論酒肴
まで見えて居る人を見るぞ大きな落しぬ。此母から又
茶所では内から持て来た田楽が出される故から
来て茶屋から酒も飲さつさがよいか外の
悪いと踏ふつもして落る。其又向ふの茶屋から所

しかし又よそせく見てゐる人まで。場中を見廻し
桟敷の毛氈花莚の酒肴やら吸物やら弁当
やらおちやら中居やら又よそ〳〵楽んでゐる
人〳〵を見て咽乾かし。イヤモ芝居を場で見る程
結構なものはないが此後からは桟敷にとる。其また
すは是から肉食を始まりて年忌法事も止
まとは彩るふ場所へ来て見んとむ是は世間の外
存ようそれ等じやとホテ〳〵踏出して帰るで
桟敷で見んでゐる氣ハどうでも桟敷の気持

る。茶屋へ立寄る氣も肉へ立寄て見るがよい。其
次手に此方の身上もさつき潰して費ふさ
ら一向氣が散乱して宜らふと。向ふへおもふ
おもしく氣を張て我蓮華を踏落して落る所じや。
是が芝居のゆゑかりおやる所へ。皆我勝手でかる違
義をおもふ。是人の商売が好じく。げき宜
らふう。是がようらふると。よそで見んぞうう思ぞいな。
何よも外をあるうは今日我身の請得さ天
命が則蓮華じや。茶屋ハ茶が蓮華。酒屋ハ酒が蓮

華。紙屋ハ紙が蓮華。百姓ハ田畑が蓮華。皆々銘々の
商賣が蓮華じや。我天命の蓮華であるけれバ。たとへ
かうぬきところへ入れど雪隠虫でからゝじまぬ雪
隠虫も糞が蓮華じや。彩ある物ハ奇しいやうな物
なれど其濁穢がなつかアノ糞虫と對見して今ハ同ト
虫ハ時もしらぬ。松虫や鈴虫ハ結構な籠に入て重
宝せらるゝ。其元ハ不仕合せなものじやる。扨も悪
臭い虫じやとて水で洗ひ。結構な座敷へ一服なの蒲
團を志へ其上な置て。なるりで名香焼て嗅した

ら雪隠虫何ともなくやみなる。鼻をひこ〳〵して扨
も悪くさい嗅がある道ハ近所へ糞気ハ来やせぬかと。お
ちつへふげ。こちらへこけ。ころり〳〵と逃まはりぶらふく
雪隠へこけ込で。ヤレ〳〵嬉しや極楽じやとらふ
て脇でまをくへしう蒲團のよふな艶莚ともらと郷
気がりてツイ死で仕舞ふ。何でも我得まかうけ天命で
うけまいが安心せねどろうさでも是横でみやふがどのやう
なおりし孫ハ花見松山に楽しさ。或ハ結構な座敷
で山海の珍物珍味。種々の山海を遊んでも我内へ

戻道ばやく嬉しや。極楽ぢやと安心さする。君子は其位に
素而行外を願ばずとはよく我分外を願はざれる
いふで身に備りたる天命の運善端などさねそう。我
身に立帰りて今日乃有難さを知るのじや。其上が
天命まゐらせ
櫓も擢も我とは元しじにはま不知で浦々の風まかせて
天の次第にのるさ次第て楽になる。何事も不自由なる
事なるは麦も出る米も出ける。夏になれは西瓜真
棗秋になれば柿の栗のとそ飯のうへにはならぬ物

まで。天道ハ免たてるハなど世話もやかしも患にさ
せる心ハなるハ其法仕送りに預りながら足納もるとべ
知らぬに。結構な座敷でふとんの上にねながら。夫での
もりぐすりに並べたてる。責ハ親しいて何喰ふても味が
なるは。是モフ胡麻入てたもんなのじがゆうな。因果な
ものく。どふぞ法助けるさうて下さりませ。其上が
どうり助けられますので。一生の難いとらぬまてぬ
生得といふものじや。どの位しても気からすの出
来ぬ親ハ難義なものぢや。是じやによって治まち

いさんけり。嬉しい〳〵とし付さがよい。うましい〳〵
とし付させれ成仏しても悪法愛て人がつき合が能。
鼻しかみつりとし付さるれ。我ぶりて人のことるす
が気によらぬ。ソコデ腹立るが倒ずまへや。ちらつと心が叶
わぬらが又我了ゐ不合ぬるすが何のと。扨もしいや
な浮世しや。もちや此身に秋呆し。のみへ極楽参り
をして下さりませと。鼻の先の極楽志しはまさ
極楽がみうとおふへとぞへぞ助けて下さりませく
六道の衢に迷へぞ。何かまちる極楽の其中に居て

極楽の其中に居るものが。どふぞその上が助けらるゝ
ものかやぞよいかげんに迷はぬ恋ざがよい。もし仏
様が何を乃晩迷ひに来ると掛ま每何さら。イエ〳〵
まだしどれ先のるで候ざりますれと。辞義をる者の
てみよが先ッ極楽の仏様とは何と云さものぞや
ぞどろくり吟味して。達者な内から仏様に近付
にならんさがよいそうなと。極楽で付合が出
来ぬ先生の子守ふれ内の仏がやまさうしてやい。
門の二王に先ッるすやと。ヂア仏様より人にみさが

よい。今日の人の道を今に勤める此方様方と。佛様とも神様とも聖人とも君子とも。號ともなを付さしるやら皆名は添ふる。悪人ともいはれ善人ともいはれ。様悪なものともいはれ。盗人ともいはれ悪人との勤め方によ通りを行ふ道り号を付さるものじや。而して見れば極楽といふもよみぞ。極楽も瞼毛。地獄といふもの仁ぞ。地獄も此瞼毛じや。又は近くさよみぞ。地ぶを遠きと求む。あまり近すぎて見付ざりたりぬてさ緯義をるなりとをるいへるでこなら風情。極楽の道ひとを行そめるものもあるいまだや此方から押つけて往さるよいて極楽へ往くとも。弱藤より行る地獄へよりとる佛様ではなかつたに。今日から稽古して強気行衣服ゥ仕るふさがよい。空腹くしてのるこアイ地獄の近道ひ私は舎てゐるものじや。こりやするぞや。先ッ極楽とはいづくぞ。西方十万億土ともいへば又唯心の浄土ともあり。ハア近ひ方から吟味して見るがよい。極楽清浄土といふて。別に極正しい清浄土潔白の所じや。其清浄土な所へ此方から

業障ぢやによりおちて行ツヨリ極楽の住居がなりませぬ。是
の毒なものじや。回向は誰がするぞ。親は回向する
しやせぬ。子の親じや。やはり回向せうぞ。子共
なげる親ある親まてよいが上にもよろこばしく。
ご成仏は清浄土。其まで皆子の方から回向おそ行の
まや。大きな罰にあたり。何と勿体なるすじやなへ
又冥は誰がしらんさりのぢや。御上は清浄去ぞ
様はいやがりてござる。其所は家尻切もする男も。獄
門も。張付も。火あぶりも。皆此方から捨て行

のじや。扨又地獄の絵をみればどなたもござるぞ。目がぬくと何
がおかしいかといふに。みなが上にも積もりて。何をいふても
金のなるじやくと。棺桶へ真逆様に投げらる。金を
抱へて地獄にぞ入る。或人の異なるに 棺桶へたとへなに
判を据ゑさせても黄金仏にはなりはせまいぞ。皆餓鬼道
引摺げて行のぢや。餓鬼も畜生も。地獄ものぢやなへ。
腹の中を能吟味して見なさりやますまいね。扨其餓鬼の
中でも未来一下り握りし飯一盃さへ食いで合点とする餓鬼は
あまひなれど結構なる着物着て。大きな家屋敷を構て

強ぶくまの餓鬼がいる。といふが扨て悪い事を仕居る
或は賣しめ買しめ世界の咽じめして悪い事の一関と
する者も謂りないども目にも逢ある。なれど懲もせずと
ゑぶとくは餓鬼じや。皆地獄の形容じや一切心の遠
立する地獄じやによつて造地獄といふ此方の勝手に
造るゆへ地獄は手細工。極楽も造極楽といはるゝ。
極楽は生れ付のじや。此又形も姿も目も鼻もに
足まるは心が。其中ゆへに種々に様々と次第をいふのなり。
呵責せらるゝとはどうしたものぞ能考て見らる

ませ。或は主君の大切なる用事。又は家内のお勤を
又と仰付られし。其用向をとんと忘れてぬく其忘
れし故によつて。刑罪に逢ていふ。其まゝとしさ
心はどんなものじや。又忘れた思もどんなものぞや。二ツ
ながら形も形もあれども形のうへでは追放
遠島か。或首か。切腹の科は道を恐しいものじや。
其はまくするだろうかが仕すぎやうに内でもし一念
おやまちは道さなりで成長する。其答じや。形も
形もあれど活染て地生ものぞや。去による

て日々に新に時々刻々に新に心を付て吟味せにや
ならぬ。此造地獄のたとへがある。其向在郷の薹擦の
溜りにくそ所といふものが出来る。是が寒明るまの
でる一夜され寒小丑六尺計れ。甚丈などにもなるもの
じや。草までもなく本でもなく。其形叢莠葺のごとく
発だろうがおふて。喰へるものでもなく。役に立もの
でもない仕出しはまなりに腐てそもとの薹擦と
なる。何の役にたゝぬものじや。それど是がてきる。天地
の仕業の稀有なることを考て見らりじま

せ。薹擦場といふものは何世が世てさまぐの。
悪濡ものだろうが積重ている処を天地乃蒸
夜法湯の薬饗でむしよう豚へ仲入其腐りの一ある
込が一備に形を顕はしそのおや。麦でも米でも
豆でも小豆でも。其外すけの知れものはすけ乃
知る一通りに正しい姿を顕はる。又すけ乃知る一夜
のはすけもふ形を顕はる。油断ならぬ是たやれな
つて腹の中に塊が溜ると。かいやくやくしてすつけ
もるいくそ草が。ねんねく生じて。何の役にたゝぬ

ものじや。一念も麁末にならぬといふは爰のことじや。
一切万物因縁因果果報にもれず天地の為に生ぜ
るもの。此形頭にまとひつきたるものはない。去によつて一念
生ずる其ところを吟味して種を下さねば。皆くそ
縁につれぬやうに仕出ふてそだてあげつぬく一生をおくるそれ
讒悪なるものじや。どふぞ目を覚してはたらかしませ。
大切なるぞやぞへ

道二翁道話四篇巻中終

道二翁道話四篇巻下

浪華　八宮斎輯

一佛成道観見法界草木国土悉皆成佛と。
釈迦如来も始めて目が覚さ。和泉式部の歌う
葉も花も佛になると説法のまゝをはなれぬ山櫻かな。
とあるも二ツの心を見付たのじや。天理におしても
私心はない。谷蔭の櫻がでゝしれ人の見ぬ所におるやうに
ておそくもよも咲ぬ。操心しいまことにいつはれん
其心を離れぬもの也。阿の一字。此阿字がいづく
にあるぞ。臓の中のいのちていふ。此いのちてうくる万物

一念とまつての形のよふなことをおもはれんちやう。しかし鳥や雀のやうなものでさへ、森羅万像阿字のそらへ。き阿字はぬなるものじや。けせうな私ひとりが自慢しさとく役に立べきまでもうへ。釈迦如来も天上天下唯我独尊と云てござるも外のものゝやうへ此阿字のいさうを上は梵天三十三天のまさ上から下は金輪ならくの底までほりぬいた。寿命の限りもないことゝも久遠劫から尽未来際まで治通しの其所じや。其因からぞ縦横らしせ三千世界ともなど

も。大海の粟一粒じや。况や其中の端くれども何程のものぞ。娑婆ことへいふほどの分別と深回して身。ごふのかのくふさえく塔の相すでするへばほど此娑婆の中へ三千世界を入まするものは智恵ど三千世界へ娑婆と入るが如来勝いもの器じや。三千世界より娑婆が大きいのじや菩薩が大事の所じや。どうぞものではらしじやうせんか。何ともむかしいすじやるへ。右の明徳さへ天下に明らかなるのじや。故に放てば六合に彌り、巻ば退て密に蔵るより此限りもないきなものを、自ら狭くの心として

居るから。何がをかしいへ。をかしいも止さがよい。止さしこそ何ぞにも不自由なき幸なるは。此光天の賜一つでさへ、天も大神も苦労に思召ぬやうなは、是程ありがたいことはない。三世の諸佛、梵天帝釈、四天王、八百万の神、達水神金神、山の神、荒神の神々にも及ばぬ。世界中から此身一つを大切に守護してござらるせうそは、則天のありがたやさういふ夫もあれに。我身がものじや。我身が難じや。我身が身で我身がとらる。夫が何といふのでお身が家じや。我身が食じや。やくましう思

る。国を明て藤でとらへてぬるとらへりのぢや。去りながら其は勿体なうも一向人といふものへいへずではなし。先今日現銀にて女猫募りにして見さがよい。普天の下卒土の濱、みなことく王土にあらぬといふ所はなし。然ば一つとして何さ一つも皆天のあたへたまひ。此世の中にうまれて居るものがみな天のもの也。天の物じや。天何ともいへば、人に御上に命じて天下の万民を預け給ふ。則御上が天の御名代なれば民は天じや。人は御上のものにして。此身は御上

まうの殃うるものじや。去によつて一世と今へ勤め
あふせ先祖のよつぐ縁絶しても。御上より立盛
る。此寺の役めを請り。隣家の證人をたのみく一ろ
家親類違けれバ。此上より立会う。墓所の汲
坊が請えらねど。やうにく。櫃明白に葬礼して、
御上の地面に死継ぎ。其後町内の人別と除く。
是でこれ此事まで御上のかし。物かるうす腫
得心えてさがよい。まうしに御上の金銀米銭とん
て親類の追福。諸入用を元綴ふとのふりのぢや。
るにりまでも合点の悪い人ハ。我家や我入まりの

にあるを金ハゆつたり我ものにゆうりに深乗沈迷に
るひ諸てかるまものじや。分きじえ来御上のもの
なれバ何時召上げらるゝとてもさく仕まうするまいハ。
までも至るハ大慈大悲の御まり。仁民と云事
殺しをまけ。士ハ不義不忠を礼し臣百姓ハ
農業乃臣商人職人ハ市井の臣と云ふて其々
の家業のうえに御定めありて利益と下さる。其
を天禄として今日を送る。是ハ云いでも知れ
たるじや。右申す通りに先祖の上で国出うに恥記
たるのでさん。皆是御上乃此世話じや况や逆死

横死のものに出るては。御撿使をうけられ。吟味に
ぎんとして明白に御糺しなさるゝ是が直に天の
御制度といふものじやから。一つく能々味ふて
見なさるがよい。此世の中に御上のおそれを絡て天の口の
端ゝ女中上るも咎多いなれど。手代衆や女
子衆は是と何とも思はぬによる。勿体ないこと
じや其上何にも志らぬ下賤のものは。女房を呼
んで子が出来ると。自分の慰と楽あそびにし
らへさ横にそふておる。たまいもうるのじや
是も御上より御定在る所の宮寺へつきて

剃り此度から外れたものが。出生して一ヶ月ござり
ましたら。御改めや上る。此宮寺は直に天の御店。
それ故地を守護で候じ下さる神佛は則天の代名
代なる事人の目見え人銭を受其上御上の人別帳へ
お記をでいうから。其上よつて我子なるがうしも鹿
でも付るの殺害でもするとき急度其科を法糺
なさるる是で我子も我子にあらず我身も我身
よならぬ事を能々知りなさるがよい。夫より百姓でも
町家でも。おそくも家内大勢なれば金銀の掟へも
なるまいが共きうものじや。出きるが命。ぐやと乱法を

まいあらハずく。ホシてくまちる其ハ命根本猿家庭為流
ゐと奥ハやよ及ぶぬ裏の垜場の茎一本までも皆
天のものじや。どんな私らのやうな者でもらんまる
い。我りのでハない洗操がる。どんなことでも麁にいご
こにならぬ。どこへ行ても麁も婆ハ外のものく
因よりハかんえるけれど。麁さりのれたんと志らぬ知らぬ
答じや。本来室乃天じや。ふじの白雪稲月でと
けるぬ。若し私とハ麁てとけろ。どふもせう事がない。
嘘なら麁い時覚てみなされ。本来なく乃息
なり。其ハ氣とふなも知らずやせぬまでも目が

ぬと押まがのじやくくと見ゆるが。其ゆへに石奥のまきる
物の換よ二色も三色もなるりのじやうに。能く試
ゆうみかんよりぱすりするもゆうなり天のがり相じや。
まで由りハ世じや。天の由りりのなけとそ天石様が
ら大切にまなさろて下さる。其天乃換料物ぞ膝への
可愛のかじいの押しハ乃何の由の一も死でハ承よ跡でも
まつぬが。どこへ行ぞ去律さ此類まで並て行なや
あるねじやうなへる。地水火風の尼いも麁して仕舞ひ。
外る一ツハ本来の空じや。其も本来へ帰して仕
舞ひ。何もかもを円ならがんと引さ込まさく

まひ仕出ふさ所が引移りて。生涯何のかのつくりは
やくやいさ。小言の粉ぢろぢり。貸ふら貫ふて。跑
出三途の川中じや仏じも虚空でじしらん。女
咎を。虚空の中へ捨て置ては稀門から生れるも
のぢやぢや。丁ど風の腐さかゝるものでござる。住様
のるい。所は又天は湯湯乃蒸籠でもしまて一層
一毛も違はぬものに製法なさる。気が能ウ出るの
じや。出しでもよい所へはのまだば上へ引上て人を治る
りのとゆえ。又出しても悪い所は一生漂泊数ひ哭
雑病雑行論式は飛禽獣魚鼈虫などの類ひと

様々さまじくに様を仕かけて。又形をとじらんとく
働くうは能ウ出さるのじやも中でもまけ乃道
ぬ所は皆くらそ尊く成る気が又天命じや。此大
なる乃義用とらへるのは中々人間の及ぶ所でござる
い。天乃りのじやとらふるを性に安定しさがよい。
去によつて此観を三世諸仏梵天帝釈仁王天王
八百万の神達の守護なさるといふ事。上は天子様
より下庶人に至るまで。須弥山の図と同じ事
おや先祖しい続くしものゝ身に来りて云ふてきれ
せうから。登る湿気を吸ひ。風は犯血を喰ひ数る

へのありと禁しむ嵐る家宅に住て悪虫を喰し
天人の妨害を掃ふ役人なれば。獄に八百万の神
達臺殿せ身をなさるといふものじやうい。かの悪が並
に天命天の法令といふものじや。それど情ないうつう
みをやて商人が天命の職分をもりて。世をおる
利ど世を見てゐましげよい。それど人欲の私心といふ
ものが出て。ツイ世を見に天下も。又欲があつて我身も利と
貪るじや。まが更に天命に背き智無人身の覚ひやで
あさく雑義もするとはしせうなるもので。風も天命の
食分の濫乱もおりと吸ふてゐるなる人の害よも

らねばならぬ。どこへいつても私心が出ると味ひよふなりまするの
正直をむさぼるじや。ソコデ梵天帝釈いろう様へが左右
のお手乃毘沙門天並に風を引つましし。大腹乃瓜をくふ
ちんと刑罰しなふ。蝦も又毛なりで。人の處りを禁
めてゐる向ハ。自身の役前ゆへ身にするはぬなれど蝦
も私心が出ると正直を盗むゆへ。庇りの手の指図天
王なをひろげひきなりと。斤手の事の御制罰や。
是が神佛でも菩薩上方でも。殺生の恐ろしいものなく。
罰の当るところいかいれしと天命の御役目といふもりの
じやまよつてど今も是非るい甚外蚤も嵐もたへも

猿も狐も狸も一切禽獣はじめるまでや。此のまゝくが
天命の職分を守つてゐる中は皆守護神じや。
されどもし少しでも私心を出せば直に天命に背く事へ。
御刑罰を遁るゝ事はなるまいぞ。何が神仏は慈悲
深いといふ事なく。それもよいは是もよいといふ事ぞ。法報し
なされて下されうじませぬ。世界は丸で腐て仕舞ふ。西瓜の
たねの落さるゝなりのぢや是でとくと御考なさい
てくださりませ。何と面白いものはしからぬ。ありてなる
ドやはらうじませぬか。大衆ぞ難いりのゝ。やはざりま
せぬぞ。人は一箇の小天地じや。須弥の四州の雛

形て三十三天も。金輪ならくも身に備つてある梵
天帝釈も四天王も皆天の御分別じや。八百万の
神達も一切天の法他物に遠ひはない。痰まく腐てゐ
る時。蚤蠅が食ふ程も知らぬ是が兄ヶ働
いて制止してゐる。皆是天の法。切用て直に天の御
分別じや。能ゝ考て下されうじませ。神門は天に私心
まうは腐てゐる時も。起てゐる時も。密語密縁合一として
ては、しものぢや。此世では世話なさる天下や猿が。
迷ものなれば何ぞ天まうせはしてくれらうじませぬ。
何しろとく何にも気を付ひなされはざりませぬ

担ぎ一〻をお殺しても。今日の天命にまかせう
ひ教の無き大切に勤るのじや其教ではござらぬぞ。
則今日が道じや務くどものやうなる愚智無智は
ものでも。心無に勤る故。天から書付をされて教て
ござらぬ。右慈懐する御制札の写則天への御言葉
天の御事也いづれも謹で拝聴あるべき
一 親子兄弟夫婦を始め諸親類に親しく下人眷
にいたるまでこれをあはれむべし主人へ奉公の
く其職業は精を出すべき事
一 家業を専らに勤め万事其分限不相応之事

一 いつはりをなし又ハ無理をいひ掛けて人への害にな
なからぬやういたさゞる事
一 博奕の類一切禁制之事　尚此外ハ時々之
何れもみな難ひ無造作なる御事じやでないか。どふぞ此通り
と務くどもに勤めさしてたまはるの神道の教儒
道仏道の教へじや皆是法の御事なりけり。此則
天の御言葉じや此通りを勤めさしたまへとぞ。家内
安全商売繁昌子孫長久の御祈祷じや又家内安
全子孫長久と此進ずるぞなるぞ。皆様く其身
〳〵の徳にあるじやうな。家を継ぎ所合点あるさう

まぜ。此身も心も天のものなりてこそ。此様になればよく
なまじ世話をさするやうなことは能ゝ考てはならぬし
ませツンテ毛が何でも何じいなか。親子兄弟夫婦を
始め諸親類によくしうして中和で暮んのじや。銭
銀も入らぬさで出来る仕よいもの天上じや。又孫達で
喧嘩もとうあと仕勝はすれるれど。夫が少くせぬ
であるゆへ。和合で暮んぞ。何にでもいまへさうのゆるゆ
なふし。どうかして是が親まうりので。勤めてもおんと
よ天窓うし退隠してつれをせうるは上方くハニア一日
勤めて見さゝよい結なうは上方余業は御無用とへそ

ふらく二日勤めてならうじませ。今度うし工面して。何
との朝とふうし起て手水をつかひ先ッ神へ礼と後
拝し。親巻の今日が祝日。一家親類中和睦云
の始り何とぞ今日一日首尾能ゥ勤めさせて下さう
ませと。なふ一日の秋をうける。扨親様より始めうけ
る親又様は膳とはあうるさうませ。は相伴をいさし
ませ。扨何にで用のあらまそへゆく事なりで親は
様の前へ行つのへ。どこそこへ参りてまんじませう。
又戻つてうら只今帰りましたと。夫も口を出さうし
て言ふのなからぬぞ。此分ならうしくと推るし

うちハ。母様是ハどふいふてしませう。親父様是を貰
ほしてもお辛抱でござりませぬかと。一ッく親御様方と
お談しして。後よりも我まゝ気まゝをもらすもしらぬ。親
父様ゟうハ体とろさまをまず。母様ゟうハ体と云さ
まませとニア云ふてはらうにしませ。大きに心よいものじや
はざりませぬ。又兄弟乃あるも甚だあるまじ。何ほどう
もろのじや。其外諸親類のあるも同じでも争ふ
は法度。忽天下の罪人と成る。おやと深く恐る勝
一家親類よりちうと安穏な事いふて来たら。如猿
兄様はむしくとも楽いさして此道の読しませぬと。

ふこしりくしして當八のおやざア一日勤めて承らうしませ
其人孫節の晩とどんと極楽世界じや。是様のとを
出来ように。何ほどもめうしい事もやうハしめぬとの大
人ハ来るの心と楽みとよふ。其のほとなれば勤
ろのじや。極楽ハ一日も又一日乃親うけるとふで今日一日
も勤めさして下さりませ。ゆとりへ芝居も見ま行酒
も飲む茶屋へも行くちもみつどふぞ只一日と
どふぞ親うける。毎日く其まゝ只一日ヅヽの親うけ
て勤める気が退屈せぬほどあいじや。どふでも神まて
のあるハうれしいたまどぞ。どふぞ辛抱して十日あと

噬ゑぶりて勤てはならハしませぬ。それをしらで御勝の中
に性いらひを定めまする者。それを常住坐臥にたしなんで後にハ何ども
なう勤るものでござります。其勤てらうに勤め捗てせくらし大きな
ものじや。此物ぬをさせるかゝりの神道の教。儒道の
佛道の教じや。八万余巻も。四書五経も。孔孟三百篇
義三千も此事じや。是が勤としられますつて三経
否釈迦様も孔子様も。釈迦如来様も。阿弥陀様も三
世の諸佛菩薩も八百万の神達も皆ばうしふかしての御
教じやぞよ。一日なりとは勤めましれてはならうしませぬ。
些との其日の商修業おろそかにまいる。根下人もよまるまいぞ

是とあれ道とせべし
一心せよ。ほうまゝ人のなひまぞ我をなひまぞれ捗りひさうくべく。
主人たる人ハ家内の者を子とおぼしめしてよいりのうしそ。家を
立さしてやりたひと心親を孔しさがよい。家内の
者どもおりうも我さん立身出世さして申しくれ主我
旦那さんは至かす道しと案じひを立さがよい。阿弥陀如来
とほしし本親を親しして見さがよい。家長久の基い
ぢや。みなされが出来ん人旦那役をまて知つて体んさ
がよい。我勝をなりうちて人を追ひ出しおもいいた
するものうえ天命に背く悪人じや。害の端緒も

せうの義を摘ならバ。コリヤ長吉八百屋へ往て茄子を買て
こい。ハイ〳〵丁稚殿横町のうどん屋で。蛸の足喰ふて
ござる。皆執着しの務るのじや。隠れて居られぬか
くまいるより取けぐれぬじ。主従諸共皆人がやぐ人
一主人の業を担のく甚奉公の精と出すべきぞ
天地の間に主君の無いものはなるい。同上ハ皆主人ぐや。
それども家では先ッ者は親や小舗親族も各出んなど
なしハかりもやかりぬ奉公とは。公に奉はるとなど。
奉公に出ると月からは。主人のものの我身としてま
恭る微塵もないとも足の小指の先の爪の垢までござる

主人のものじや。此身は奉公に出た親席方か離れ玉ひ
持てきたやうかもぬ我身なきぬ世話が出来難き
ゐるゆへ主人へと我らゆ其身一生の身の納まを我むの
ゐやるのいふスリや大錬籠かう云ひ持て来りやる
ならぬ又奉公する孔も能ッ合点しこうよい主人へ命
迄の命の親じや。たとへバ一季半季の奉公でも奉
公をうろうハ天命の奉公じや。我身としてきのハ
みな皆主人の難しやそれに主人のたつしらいが。
ちつと悪いと我を曝らしびんく顔出りモウ
暇をく外へ行く家ぞうハ日ハ出で此ゑとて。却の

よろ心の晴る事を知らねど。只継て立身出世する事を
罰なくり一生不仕合なるけれやむかね候ひよ出ざ
せば晴る迄。実喰去り。余る誉古云ふり三
味線習ふ事り。身の嗜をさせて外かぎ雑を
どこうり盗を出しきりのしやぞ。女中方なる云の内
男聟旅をるよ行く夫の縁れ。一生不仕合
なぞ。皆天命よ背く有難き世をやわらねばうね
うれざるくてまいはくらいのつれまいくの首て
尾が。節気をぬくさると。を縁く主人の物
を私しるる事なる。てうひりのしや。それでもはずらね。

道りの命よりつき罰なくれく、しぜん、く罰が
大きくなりてぐうく請人呼出し。親兄弟の身よ上仕
出ひさもうすくいゞ。身は名の衣服もなり。太股は迄の行
親どや是がいやさふ難じくが着うりて世居る
さるのしや
一家業を専はし勤めすかく万事其分限よ過
ぎうざきるの。我商売の外よ心をとまらう。是
まつり。不附のまりつけを細ぬしく商売不精で。
のらくら手足は法度さや其分限よ過
ぎうらはと。食物らぬる物らう。是しらは是ぐる

によとハせねバ此苦労のハ分限に相応ゆゑと我身と引合しおふしても奢るぶん其事つハ。心得法度じや。其上におごりくするハ衛帯が来いぞ我家業を大切にして随分仕合せる様に勤むる外に人に用ひられまするとてもよい家の善語を見ならふ人がよいものの事くみると咽かわらし借銭しても負まいくしと力を尽す事それはまけもないのじや。別して女中方番頭屋出入衆てもめんくみなを出入のじやうへぞ。是ハ我身分に叶はせねバ是ハ何ほどの徳あるもんぞと。分に立入りて見ねども其ひの外見聞に知るゝ事もの共やぞ人様に女房衆より外に隠れのあるいものじや。それに此母につまぞんぜくとして奮しくみるとし。連合の身上を伝ぞ家様にしてみるのでハあるべからし。折て天も思まで見るがよい。是も女中方のるだうくおやうへぞ人皆銘々くの心得のじや。行末満る迄も行様でもしてなやせぬうと。家に立帰りて吟味をするのじや一門まうを見てき無理をいひ出して人の害ならぬべき事ともべかしざるゝなりぞつくすかく

うらねばこそ我身の勝手ばかりをするのは無理し
こゝろのじや。無理をする者は悪く御法度ぞや。兇
や人の難義がるをするもの。盗賊強盗の類に
して大罪人ぞや。たとへ權勢ふして暫く幸ひに
無事にとても死人がものがいてめうかうなりので天命
遁れぬ其つみの果報ひ冤難身にまとひ難病
に苦しんで。流浪して宿りでも叶はぬ事が有る
天の御刑罰じや。
一 博奕の類一切禁制之事と御法度に候元一六又
とうるのかく御法度じやぞ御法度に背くものは。

皆天下の科人の内じやぞ。天命に背きのもの
事が不仕合なる子供は友達が悪いと不孝がう
が悪うなりとけりれ大口きふさう。あれう
口てく手柄のやうになそふきめる。さすれば気
の毒なるのじや。自然と身に
に仏く家をお崩さうやうなら親は様方が
とりや云ひ出して通ねと。行末ひよんなるものに
するぞ。其外備縁勝負事。皆博奕の類は法
度ぞや。都角天うら此世うに行倫でもなく。指
も又手採ふくいろが結構な類とりうひるが。

らぬ雑いふもおろかじゃ。天の此手で博奕打なり。
盗人なり。何の事もないぞへ罰が当らうやうな
ぬ形な人でないぞう。なんぼくわんくわんしてゐ
るのじゃ勿体ない事じゃないか。縦ては家を亡
ぼし身をやぶり。子孫の難義は何程の事じゃ
ぞ。きつと吸め懐まれぬ事じゃ。又天命に
背き悪い移びせぬやうにしやく。何かもよろしう
ある小悪いものじゃれども天が抑かやけぬもので罰
が忽ちにくるものじゃ。それ自然と其身の
徳め不和がるい放縦い切る名数をかして仕廻ふや

うちぬけ天の網といふは世界に一ぱいへ張渡てある。
されど小人の目ではわからぬぞ。網の目があらひ
ゆへおそれるは網の目をぬけて知れぬやうにする
が何がもしるものじゃ。是をまぐれといふものぞ。
ソコデ是いふまいくと晦し人我の私心増長し
て。我悪い事我も知らぬくとしてやうやく内に
咎が大きうなる。何ぼ網のあらうても。ミウぬけ紙
するらぬ。ソコデ我から手でひきよって網にかかる。繋ウじ
さるのじゃ。天の命は逃ひは逃るべしなさる逃ひに
道きかれし。天の命とは。我不覚悟で人は

歎きより試ハ物の掛り合にかく雑義をするうち
立ど我もえうろに志をさするゆゑが。雑義をされどして
其の手お涕が道るゝ事も切にど我とてうそいはぐ
らへさ皆ハ。ごふも道中うかるゆゑ君子ハ其獨と
慎む身よ立帰りて吟味せすやなるぬるで也
ござりません

道二翁道話四篇巻下終

国立公文書館
National Archives of Japan